

加藤周一文庫公開購読会『羊の歌』を読む

加藤周一現代思想研究センター研究員

半田侑子

「二・二六事件」

【梗概】

加藤は1931年満州事変のはじまった年に中学に入り、1936年二・二六事件の年に中学を出た。その間毎日新聞をよみ放送を聞いていたが、日本がどこへ行こうとしているか全く知らなかった。それは加藤の父も同様であった。父は夕食のときに、起きた事件について自由に考えをあらわしたが、それは検閲と自己検閲を通した報道の自由のないところの情報を材料にしていた。

加藤は父の意見を聞きながら、その矛盾に気がついていた。父の世界の本質は、あらゆる事件がまえの事件との密接な関係なしに突発せざるをえない、予想することのできない、明日がどうなるかわからない世界だった。一方で母は、個人的な経験、個人的な愛ゆえに、英国人の全体を呪ったり、「聖戦」を受け入れることができなかった。

加藤のいう「空白五年」の最後の年に起こった二・二六事件は、加藤にとって、政治が身近に迫った最初の事件であっただろう。しかし、当時の加藤は情報を分析し総合することができずにいた。加藤が二・二六事件の意味を認識したのは第一高等学校へ入り、矢内原忠雄の言葉を聞いたことによる。加藤はそのとき、二・二六事件の意味とは、軍部独裁への道であることを理解し、矢内原の言葉を「日本の最後の自由主義者の遺言」と捉える。二・二六事件は加藤の政治に対する態度を決定する重要な契機だったと言える。

【この間の出来事】

1931年4月 東京府立第一中学校入学

9月 満州事変（十五年戦争のはじまり）

1932年2月 井上準之助の暗殺（血盟団事件）

3月 満州国建国宣言、団琢磨の暗殺（血盟団事件）

5月 五・一五事件

9月 日満議定書

1933年3月 国際連盟脱退

5月 滝川事件

1935年 天皇機関説事件

1936年2月 二・二六事件

3月 東京府立第一中学校卒業

4月 第一高等学校理科乙類入学

5月 斎藤隆夫の「肅軍演説」

1937年7月 盧溝橋事件（日中戦争（当時の呼称は支那事変）の勃発）

12月 南京大虐殺、矢内原忠雄が論説「国家の理想」によって退職

・『羊の歌』における加藤周一と政治― 加藤にとっての二・二六事件

二・二六事件によって加藤が、はじめて政治に関心をもったのだろうことは驚異力が『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』（岩波、2018）においてすでに指摘している。

加藤が実感として十五年戦争を意識したのは二・二六事件からかもしれない。

「二・二六事件」は『羊の歌』において、はじめて政治が主たるテーマとして描写される章である。

政治に関する加藤の姿勢を表明したもののひとつに「私の立場さしあたり」が挙げられる。そこには以下のように書かれる。

私は「政治」を好まない。むしろ私は実験医学の研究室で、あたえられた情報から、水も洩らさぬ論理でひき出せる結論だけをひき出すことの、一種の知的潔白さを好むのである。

「政治」については、そういうことができない。政治についての意見は、ほとんど常に、不十分な情報から疑わしい手続でひき出された不確かな結論である。また私はひとり閑居して詩句を弄ぶことを愉しみとするが、「政治」は、徒党を組んで行う他ない事業である。来る者は拒まず、去る者は追わず、これはいわば私の個人的信条だが、「政治」的行為は、来る者を拒み、去る者を追い、殊に他人の生活に力を用いて介入する。故に私は政治を好まない。しかし「政治」は、こちらから近づかなければ、向うから迫って来る何ものかである。

（初出「わが思索わが風土」『朝日新聞』1972年）¹

加藤にとって二・二六事件は、はじめて政治が「向こうから迫って」きたことを認識する事件だった。

「私は政治を好まない。しかし戦争とともに政治の方が、いわば土足で私の世界のなかに踏みこんできた。私はやむをえず、周囲の政治的現象に、何らかの反応をするほかはなかった」（「あとがき」『加藤周一著作集』第8巻、平凡社、1979、p.391）

¹ 「私の立場さしあたり」「加藤周一著作集」第15巻、平凡社、1979、pp310-311

・『羊の歌』『二・二六事件』以前の政治についての記述

「空白五年」(改版 p.85)

私がそこ〔府立第一中学校〕に入学したのは、大日本帝国の満州侵略がはじまった年である。学校ではもし生徒に大志があれば、議会を無視しろとまでは教えていなかったにしても、代議士になれとは決して教えていなかった。忠君愛国ということは教えていても、基本的人権という言葉さえも教えていなかった。教室で西郷隆盛や東郷元帥の話は聞いていたが、自由民権運動や普通選挙の歴史は聞いたこともなかった。(中略)しかしそれは英国人たちが誰でも知っているように、英国人民を代表してヴィクトリア女王を屈服させた宰相の話ではなく、みずから信じる^{ところ}に従って行動せよ、といった風の処世訓にすぎなかった。誰がいったにしてもそのこと自身は議会政治と全く関係がない。たとえ英国の議会政治と何らかの関係があったにしても、平河町の中学の教室の窓からみえる議事堂と関係のないことはあきらかであった」(下線は引用者、改版 p.85)

「反抗の兆」

「しかし渋谷美竹町の家と平河町の中学校との間を、毎日市電で往復していた私の現実の世界には、全く何事も起らなかった。(中略)中国大陸にはいくさがはじまっていたが、それは私の身边に及ばず、革命は遠い神話にすぎなかった」(改版 p.109)

加藤は満州事変が勃発する年に中学に入学し、二・二六事件の翌月 1936 年 3 月に卒業する。加藤が「空白五年」の中学生活を送っていた当時の日本は、十五年戦争の時代、また日中戦争へ向かう時代であり、「軍部独裁国家への道」(改版 p.130)を歩んだ時代だった。

「その間毎日私は新聞を読み、放送を聞いていたが、日本国がどこへ行こうとしているのかを全く知らなかった。中学校は一少くとも中学生の社会は、大臣や財閥の理事長や青年将校とは、全く関係がなかった。(中略)井上蔵相や団琢磨や犬養首相が暗殺され、満州国が承認され、日満議定書が押しつけられ、日本国が国際連盟を脱退し……しかしそういうことで私たちの身の廻りにはどういう変化も生じなかったから、私たちはそのことで将来身边にどれほどの大きな変化が生じ得るかを、考えてみようとしなかった」(改版 pp.118-119)

・「井上蔵相や団琢磨や犬養首相が暗殺され」…井上蔵相は井上準之助。井上準之助は 1932 年 3 月に、団琢磨 3 月に暗殺される(血盟団事件)。犬養首相は同年 5 月射殺された(五・一五事件)。

- ・ 「満州国が承認され、日満議定書が押しつけられ、日本国が国際連盟を脱退し」…1932年3月、満州国の建国が宣言される。同年9月、日本は満州国承認と同時に日満議定書を締結。満州国は事実上、日本の植民地とされ対ソ軍事基地となった。日満議定書は、満州における日本の既得権益を承認、無条件での関東軍の駐屯を規定するなど、満州国を日本が実質的に植民地化する内容だった。同年10月、国際連盟理事会は13:1で満州国からの日本の撤退を勧告。総会は33年2月、リットン報告書に基づく対日勧告案を42:1で採択。日本は3月に連盟脱退を通告した。

新聞を毎朝忠実に読んでいた父は、何か事件がおこると、その事件について夕食のときにそれなりの意見を述べた。その意見は、家族の他に聞く者がなかったので、どういう検閲や社会的圧力にも考慮せず、父の考えを自由にあらわしたものにちがいがなかった。しかし意見の材料になったのは、新聞と放送が、検閲と自己検閲を通し、報道の自由のないところで、選択し提供した情報に限られていた。おそらく大部分の日本人と同じように、父は南京陥落についてその感想を自由に語ったときに、南京大虐殺の事実を知る自由を全くもっていなかった。「提灯行列もいいが、この先が大変だろうな」。一しかし「皇軍」が「東洋永遠の平和」と「善隣友好」のために、婦人子供を含む中国住民の数万人を虐殺したということさえ知っていたら、「提灯行列もいいが」とはおそらく言わなかったことであろう。「われわれは何も知らされていなかった」という国民は、みずからもっとも自由だと信じていたとき、もっとも不自由であった。(改版 pp.119-120)

南京大虐殺は1937年12月であり、このとき加藤は18歳、第一高等学校の生徒だった。このとき、加藤は、発禁処分となった石川達三の『生きてゐる兵隊』を読んだ感想をノートに書き留めている²。そのなかで、カット（削除）が多くて正確な批評ができない、としながら、この作品が「反戦的」とされたことに疑問を呈している。

しかしだからと云って反戦的と云うのは不可解である。何故なら欠点を欠点として攻めるには、その人がそのものを憎んでいる場合と熱愛している場合と二つあるからである。若し他の圧迫がないものとすれば欠点を欠点として改めないのはその人の無関心をあらわしているのである。日本軍は恐く天下一品の優秀な軍隊であろう。しかし欠点が全然ないと云うことは人間のつくったものである以上考えられぬことであろう。その場合欠点を欠

² 加藤周一「石川達三『生きてゐる兵隊』覚書」『加藤周一青春ノート—1937-1942』鷲巣力、半田侑子編、人文書院、2019

点として攻めるのは日本軍を更に完全なものとしていたい衷情から出たものでないと誰が断じられようか。もちろん積極的なこう云う考えを作者はもってはいなかったろうが、少くともだから反戦的だと断ずるのは早計だろうと思うのである。(「石川達三「生きている兵隊」覚書」『加藤周一青春ノート—1937-1942』 鷲巢力、半田侑子編、人文書院、2019、p.19)

加藤は晩年にいたるまで、折に触れて南京大虐殺に言及した。例えば以下の部分がそうである。

南京陥落に提灯行列した東京市民もいれば、日比谷公会堂でショパンを聴いて拍手をした聴衆もいました。その人たちは戦後になって「戦争のことは忘れた」という。そしてある作家は「何も知らされていなかった」と嘯く。

そうした作家の「騙されていた」という言葉を聞いたときは、責任逃れの言い草で大変不快感をもちました。そういつている本人は有名な作家で、いろいろツテもあるでしょうし、新聞記者も知っている。(中略)

問題は知らなかったということではなくて、知ろうとしなかったことです。(加藤周一『私にとっての 20 世紀』岩波書店、2000、pp.104-105)

情報を知ろうと思えば知ることのできた作家(知識階級)を批判する一方、加藤は、同じ文章の中で、庶民が隠された事実を知ることの限界にも触れ「庶民とエリートは全然違う。たとえば町の商店のおばさんに報道機関とのコンタクトなどありません」(前掲書、p.105)

加藤自身も、また加藤の父も、戦争中は実際の情勢に通じていたわけではなかった。「中学生の私に、日本国の行く方が全くわからなかったのは、情報が不十分だったからではなく、情報を分析し総合する能力が私になかったからである」(『羊の歌』改版 p.125)

さらに加藤は『続 羊の歌』のなかで以下のように書く。

太平洋戦争の間日本国に暮しながら、私が政府の宣伝に迷わされることがなかったのは、実際におこりつつあることを知っていたからではなく、知らなくても容易に見破れるほど、宣伝が自己矛盾にみちていたからである。(中略) 天網恢恢疎にして漏らさず。つきつめたところ、それは価値判断で、事実判断ではなかった。その価値判断にもとづく仮定は、たしかに私の知っていたかぎりでの事実と矛盾しなかったが、私の知っていた事実は全く限られたものにすぎなかった。(『続 羊の歌』岩波新書、1968、pp.182-183)

情報が隠されているなかで、どのように見通しを立てるか、という問題は、コロナ禍の現在、切実さをともなって私たちに迫ってくる問いである。

英国のリットン卿を団長とした国際連盟の調査団は、中国と「満州国」と日本を歴訪し、一九三二年の秋に、妥協的な報告書を発表した。父はその報告書が大日本帝国の意図を歪めて解し、不当な圧迫を加えようとする者だといひ、その翌年対日勧告案に反対して連盟総会の席を起った松岡代表の国際的孤立を、痛快この上もないこととしていた。しかし国内で陸軍の政治的な影響力が大きくなってゆくことには批判的で、斎藤隆夫が議会で、あの有名な「肅軍演説」をしたときには、口を極めて激賞した。また無心論者であった父は、天皇を呼ぶのに常に畏敬をこめて「陛下」の語を用いていた。(中略)しかし貴族院が美濃部博士の「天皇機関説」を攻撃したときには、美濃部博士の議論が理路整然としているのに比べて、攻撃側の議員のいうことは支離滅裂で、愚劣極まるものだとこきおろしていた。(改版 p.120)

・斎藤隆夫(1870-1949)の「肅軍演説」(「肅軍に関する質問演説」)

→1936年5月7日の帝国議会において、立憲民政党議員であった斎藤隆夫が「軍人の政治関与は不可」「申す迄もなく軍人の政治運動は上御一人の聖旨に反し、国憲、国法の厳禁する所であります」などと二・二六事件と、軍人の政治への関与を厳しく批判した。

斎藤は1940年にも、日本の中国侵略政策を批判する「反軍演説」(「支那事変処理を中心とした質問演説」)を行い、議員を除名される。

美濃部達吉「天皇機関説」事件

→「天皇機関説」とは、憲法学者美濃部達吉(1873-1948)によって主張された「大日本帝国憲法」の天皇の規定に関する学説である。統治権は天皇に帰属するとしても、国家の利益のために統治権は行使されるのであり、国家はその利益を受けることができる法人格であるとする。したがって、天皇は法人としての国家を代表し、憲法の規定にしたがって統治権を行使する最高機関であると解釈した。この学説の要点は、天皇主権を認めるものの、天皇の権力の絶対かつ無限であることには反対することにある。この天皇機関説を『憲法撮要』『憲法講話』『逐条憲法精義』などに展開した。ところが、満州事変以後の軍国主義的傾向の強まるなか、1935年の貴族院議会に置いて菊池武夫は、天皇機関説を反国体的学説と批判し、政府による取り締まりを要求する国体明徴運動が起こった。国体明徴運動は軍部・右翼が主導し、天皇機関説に対し、日本は天皇主権の天皇中心の国家であるとした。美濃部は「一身上の弁明」演説を行ったものの、『憲法撮要』は発禁処分となり、美濃部は貴族院辞任に追い込まれた。

「折に触れて吐き出される父の意見は、しかし、ほとんど私に影響をあたえていなかったろう

と思う」（『羊の歌』改版 p.121）

加藤は『青春ノート』の「人物記」に父と母を以下のように書く。

父

私は父の或る性格を攻撃して、それを理解しようとしなかった。理解出来るということ余りによく知っていたからだ。

母

母は勿論私よりも偉らい。私は母の何物をも理解しないが、その偉さだけは理解している、母の愛情だけは。（前掲『青春ノート』 p.106）

また 1964 年には父についてこのようにも書く。

私は父と話すことを好むようになり、その話の影響を受けるようになった。

私の父は、すべての形而上学に懐疑的で、実証されないどんな知識も信用しなかった。その父の考え方の影響は、今でも私のなかに残っていると思う」（「読書の思い出」『加藤周一自選集』第 3 巻、岩波書店、2009、pp.294-295）

「周囲の社会のあらゆる面に不満を感じていたにも拘らずではなく、まさにその故に、父は「陛下」を崇拜し、対外的な意味での「日本」を強調しなければならなかった。おそらく熱烈な愛国主義者の多くは、隣人を愛さないから、その代りに国を愛するのである。父には熱烈な愛国主義者の一面があった。しかし母は、リットン報告に反発して英国人の全体を呪うためには、五年間も親しんだ英国人の尼僧をあまりにもよく知りすぎていたのであり³、「聖戦」を受け入れるためには、あまりにも息子や息子の友達の生命を気づかっていたのである」（改版 pp.122-123）

個人的な愛から普遍へたどり着こうとする精神の働きを加藤は生涯持ち続けた。たとえば以下のような加藤の文章が想起されるが、その原点は母であったのだろう。

³ 鷺巣力によると「母、織子は雙葉高等女学校に中途入学しカトリックに触れ、二〇歳頃に生死の境をさまよう大病を患い、その時に入信した」（鷺巣力『加藤周一はいかにして加藤周一となったか』岩波書店、2018、p.10）

—わたしにとってほんとうであったことは、おそらく他人にとってもほんとうである。誰でもどんな環境のなかでも、美しい時間をもち得るし、その人にとっての一つの小さな花の価値は、地上のどんなものと比較しても測り知ることができない。したがってひとびとがそういう時間をもつ可能性を破壊すること、殊にそれを物理的に破壊すること、たとえば死刑や戦争に、わたしは賛成しないのである。（「美しい時間」『小さな花』、かもがわ出版、2003、p.11）

中学生の私に、日本国の行く方が全くわからなかったのは、情報が不十分だったからではなく、情報を分析し総合する能力が私になかったからである。そういう能力を、私は父からも、身辺の他の誰からも、習うことができなかった。（中略）そうして私たちは、平和に、のどかに、戦争の話をしながらもその意味を理解せず、「おそるべき重大な」内幕話をときどき聞きながらも「おそるべき」ことがわが身に及ぶだろうとは決して考えず、要するに善良な市民として、一九三六年二月二六日が次第に近づいてくるのを、それとは知らずに待っていたのである。（改版 p.125）

・加藤周一が語る二・二六事件（加藤周一文庫未公開資料⁴より）

背景…極右的イデオロギー

陸軍の青年将校たちの背後に荒木貞夫大将、真崎甚三郎大将

軍事クーデター

1936年までの陸軍には二つの流れがあった

①「皇道派」…荒木・真崎を担いだ青年将校たち、天皇を盛んに宣伝に使う。彼らは部隊をもち、関東軍がそうである。

②「統制派」…権力全体のなかで陸軍の影響力を伸ばしていこうという、より合法的な手続きを踏んでいた。

二・二六事件を起こしたのは「皇道派」だが、天皇は「統制派」について。

「皇道派」は天皇についてしたが、昭和天皇はそれに賛成しなかった。

「皇道派」はこれから天皇が直接統治するように国家を変えるんだと主張したが、陸軍は戒厳令を敷く。

はじめ、ラジオで何をいっているのかよくわからなかった。非合法の殺人なのにラジオ放送局は非常に妥協的な。私は当時それを直接聞きましたが、戒厳司令官の香椎浩平中

⁴ 管理番号 760-1 「加藤周一『日本文学史序説』を語る—白沙会信州追分合宿全記録 二〇〇三年九月三日～七日」、立命館大学図書館「加藤周一文庫」蔵（以下、「『序説』を語る」と表記）

将はクーデターをおこした軍人に呼びかけて、「忠節の気持ちで身を挺して天皇陛下のために国を建て直そうというあなた方の気持ちは非常によくわかる」なんてね。一緒にやるとはいわなかったけれど、非合法の軍事クーデターで殺人を犯してるでしょう、充分によくわかるって一、充分にわかっちゃ困るわけでなんとかしてもらわないとね。だから統制派は最初、ずいぶん迷っていたんです。それが第一点。

第二に、陸軍のなかに「皇道派」と「統制派」が分かれていたといましたが、両者は互いにたたかっていたとはいえない。半分はたたかっていたけれど、「統制派」は弾圧して自分たちの秩序に組み込もうとしていた。かなり危ういんだ。一緒にやりかねないところがあった。海軍も分裂していましたが、海軍の「皇道派」は非常に小さく、陸軍の言葉で言えば海軍は統制派ですが、それよりもっと合法的で、エスタブリッシュメントの側についていた。軍隊は政治権力の首相の下の道具であって、政治を左右するのが軍隊ではないと。陸軍がどんどん進出してきていたので二・二六事件には反対だというのが海軍の立場です。陸軍の「統制派」は「皇道派」を支持したものか、それとも弾圧に踏み切ったほうがいいのか、迷っていた。「統制派」は元老とか貴族院とか政治的なエスタブリッシュメントとくっついていましたから。海軍ははじめから弾圧に踏み切ります。(前掲『序説』を語る」pp.143-144)

二つの勢力が弾圧に非常にはっきりした態度をとった。

- ・天皇とその周辺
- ・海軍

天皇が直接軍隊を持たないが、形式的には全軍隊は天皇のもの。

海軍は連合艦隊を東京湾に配備した。太平洋戦争を戦った海軍の軍事力だから、もし東京湾から艦砲射撃をすれば占領軍は 30 分で片付く。日本海軍にすれば簡単なビジネス、この海軍の圧力は非常に大きい。

<二・二六事件>のその後

失敗した反乱の決着があきらかになった瞬間から、事件の全体は、私たちにとって、もはや一匹の仔猫ほどにも現実的ではなかったのである。(中略)

しかし二・二六事件が私のなかにどういう跡も残さなかったとはいえないと思う。「天皇のため」と称して起った将校たちが、その天皇自身から「国賊」ときめつけられるようになったこと、はじめは彼らを「蹶起部隊」とよんでむしろ称讃していた陸軍の指導者たちが、後には「反乱軍」とよんで弾圧に出ようとしたことから、私は実に強い印象をうけた。反乱

軍の将校に同情したのではなく、反乱軍の将校が裏切られたということのなかに、政治的な権力というものの言語道断な冷酷さを見たのである。政治に近よるべからず。(改版 pp.128-129)

「失敗した反乱の決着があきらかになった瞬間から、事件の全体は、私たちにとって、もはや一匹の仔猫ほどにも現実的ではなかったのである」

→「二・二六事件の日本歴史にとっての意味」(改版 p.129)を、当時の加藤、また多くの市民は理解していなかったので、すぐに現実的な日常にもどった。

しかし二・二六事件は、加藤のなかに跡を残し、「政治的な権力というものの言語道断な冷酷さを見た」ことによって、加藤は「政治に近よるべからず」という結論に至る。

しかし加藤は、政治との係りを避けるべきだ、とは考えていなかった。

私は政治を好まない。しかし戦争とともに政治の方が、いわば土足で私の世界のなかに踏みこんできた。私はやむをえず、周囲の政治的現象に、何らかの反応をするほかはなかった。その反応の形式は、言論であり、その他の、より直接の、殊に組織を通じての行動ではなかった。私は文筆業者であるから、文筆を通じて政治に係る。(「あとがき」『加藤周一著作集』第8巻、平凡社、1979、p.391、下線は引用者)

第一高等学校へ入った私は、その頃、理科の学生のために設けられていた「社会法制」という矢内原忠雄教授の講義を聞いた。一週間に一時間の講義で、社会制度の技術的な詳細を語ることは不可能だから、矢内原先生は、議会民主主義最後の日に、その精神を語ろうとされたのかもしれない。内閣の軍部大臣を現役の軍人とする制度を利用することで、陸軍は責任内閣制を実質的に麻痺させることができる、と矢内原先生はいった。「なるほど陸軍大臣がなければ、内閣はできないでしょう」と学生の一人が質問した⁵、「しかし議会が妥協しなければ、陸軍もまた内閣をつくることのできないわけですね。陸軍が内閣を流産させたら、政策の妥協をしないで、いつまでも内閣の成立しないままで頑張れないものではないでしょうか」。顔を机にふせて質問をじっと聞いていた矢内原先生は、そのとき急に面をあげると、しずかに、しかし断固とした声でこういった、「そうすれば、君、陸軍は機関銃を携えて議会をとりまくでしょうね」。一教場は一瞬水を打ったようになった。私たちは、軍部独裁への道が、荒涼とした未来へ向って、まっすぐに一本通っているのを見た。そのとき私たちは今ここで日本の最後の自由主義者の遺言を聞いているのだ

⁵ 鷲巢力『いかにして』によれば、これは加藤自身が発した質問である。

ということ、はっきりと感じた。二・二六事件の意味はあきらかであり、同時に私にとっては精神的な勇気と高貴さがなんであるかということもあきらかであった。(改版 pp.129-130)

矢内原忠雄は1937年に発表した「国家の理想」(『中央公論』9月号)が反戦的言論であると批判され、その後の講演会での「この国を葬ってください」という言葉が問題となり、12月に東京帝国大学辞職を余儀なくされた。

第一高等学校時代に発表した「正月」⁶の草稿(第二稿)における松本先生との距離を加藤が感じるきっかけは、矢内原忠雄の辞職事件⁷であった。

私は先生に最近大学を辞職された Y 教授の話をした。それは現在この国の社会的傾向に対する種々の立場の問題を必然的に含んでいるはずであった。のみならず社会的傾向と教育との問題として大に私達に密接なはずであった。しかし先生は「国の方針とたがえば、仕方がないね」と簡単に言われたきり、話題を変えてしまわれた。私は肩すかしを喰わせられた様な気分を味わった。理科の中等教員免状を持ってられる先生が、高等学校の文科の学生である私のようにそう言う問題に関心を持たれないのは当たり前であるが、当たり前だけその由来は生活の根底に関わるものであり、普遍性を持っているにちがいない。⁸

上記の「Y 教授」は、『校友会雑誌』に発表された際には「某教授」と書きかえられている。加藤はこの会話によって、小学校の頃に尊敬していた松本先生との距離を感じた。「正月」には、何も変わらないはずの日常に政治が入りこみ、そのことによって加藤が自分の変化(「高等学校の二カ年は、私を全く一リベラリストとした」⁹)を感じる、という様子が描かれている。

二・二六事件がもつ影響や意味を加藤にはっきりと意識させたのは矢内原忠雄であった。二・二六事件の影響について、加藤自身も、「皇軍派」を利用した脅迫であると述べる。さらに、「統制派」の陸軍が「エスタブリッシュメント」であり、「脅迫しているのは陸軍大臣である」ことを強調する。日本のファシズムはエスタブリッシュメントの内部から生じたのに対し、ドイツ・イタリアは外からきた、とファシズムの構造の違いを指摘する。¹⁰そこには、『羊の歌』に描かれ

⁶ (初出)『校友会雑誌』第362号、第一高等学校校友会、1938、筆名「藤沢正」。『加藤周一自選集』第1巻(岩波書店、2009)所収。

⁷ 矢内原は1937年『中央公論』に「国家の理想」を発表、12月に東大

⁸ 管理番号646-13、「正月」〔青春ノート〕NOTE I」、立命館大学図書館「加藤周一文庫」蔵。加藤周一文庫デジタルアーカイブ <https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11F0/WJJS07U/2671055100/2671055100200010/mp000033>。

翻刻に際して、新体字・新仮名遣いに統一した。

⁹ 前掲『加藤周一自選集』p.11

¹⁰ 前掲『序説を語る』、p.145

る矢内原の姿と重なる加藤が見える。

以上